音楽科授業における学習環境と関係性の研究
－中学校・授業リポートから探る－

伊 藤　久 恵

A Study of Learning environment and Human relationship in Music Class :
Focusing on Classroom Observations at Middle Schools in Japan

Hisae Ito

要旨

本稿は、音楽科授業の背景にある学習環境という問題とそこで展開される人間関係、つまり教師と生徒、あるいは生徒同士の関係性に着目したものである。

先の研究である「子どものモチベーションを高める音楽科指導法－小学校・授業リポートから探る－」に引き続き、本稿ではおもに中学校の授業に着目し、思春期という難しい時期である生徒のやる気を引き出し、授業に集中させ、かつ質の良い授業を実現しているベテラン教師は、授業を進める上でどのようなことに留意しているのか、それらを授業観察から探っていく。

今回はおもに合唱指導の場面を中心に、指導力のあるベテラン教師の授業実践を事例として提示し、はじめに音楽室の学習環境という面から考察を行う。次に生徒を授業に集中させるための環境作り、そして他者との関わり方を学ばせるための環境作りとはどのようなものかを探っていきたい。

キーワード

合唱指導、学習環境、パーソナル・スペース、関係性の構築、コミュニケーション

1. はじめに

学校教育では 1 つの教室で 30 人前後の児童・生徒が共に学ぶ。皆同年齢といえども、個々に見れば価値観も家庭環境も異なる人間同士である。そのためグループ活動をしたり、何かを共に作り上げたりする授業では、互いの意見がぶつかり合う場面もしばしば見られる。教師はそのような時、生徒自身に話し合いをさせ、意見を調整することを学ばせる。

教室という場は、小さな社会であり、他者との関わり方を学ばせる場でもある。この点が個人学習とは異なる部分であり、同年齢の生徒が一緒に学ぶ場であることが、学校教育の意義のひとつとも言える。

1 つの教室に生徒を集めて行う一斉授業は、かつて教師が一方的に知識や技能を伝達する場であったが、今はその様相が違う。現在の授業のあり方は、教師が発信した情報を生徒が受けるという、教師から生徒への一方向の関係性ではなく、教師と生徒が互いに関わりながら学びの場を創造するという、教師と生徒の双方向の関係性によるもの、あるいは生

徒同士の複数の方向性が立体的に交差する関係性で成り立っていると言える。

「学び」の捉え方についても、知識や技能を個人的に獲得するだけの学びではなく、他者と関わることで何かを発見し、そこから獲得していく学びのスタイルへと変わりつつある。

つまり、このような授業を成立させるためには、他者と関わること、他者とコミュニケーションを取ることが必須であり、授業の中でどのような関係性を構築していくかが、授業の質にも直接関わる大きな問題となっているのである。

それに伴い、教師に求められる能力についても、これまで以上に、他者と関係性を築く力、コミュニケーション力、判断力、対応力、調整力、等が必要となり、なかでも音楽科のような表現活動を主軸とする教科では、それに加え、集団を動かす力、集団をまとめる力、等も必要になってくると言える。

先の研究「子どものモチベーションを高める音楽科指導法－小学校・授業リポートから探る－」（東京未来大学研究紀要 第10号 2017年）において、小学校の授業を対象に同テーマの研究を試みた。小学校の音楽授業における教師と児童の関係性に着目し、児童のやる気を引き出し、モチベーションを高く保つことに成功しているベテラン教師は、授業の中でどのような関係性を築いているのか、授業観察をすることで探ることとした。

引き続き本稿では、中学校の授業を対象に、音楽授業における教師と生徒、あるいは生徒同士の関係性に着目していきたいと考える。

中学生は成長の発達段階の青年前期にあたる。思春期に入り、親や大人に対して反抗的になる時期でもあるため、それだけ生徒指導も難しくなる。この時期の生徒集団をやる気にさせ、授業に集中させることは教師にとって困難なことである。

授業を進めていく中で、そのような生徒をやる気にさせ、他者と関わらせ、活動を通して複合的に多くのことを学ばせている教師は、どのような点に配慮し、どのような方法で授業を展開しているのか。指導力のあるベテラン教師の授業を観察することで探っていく。

1998年から現在2017年までの19年間、音楽科教育の専門誌『教育音楽』（音楽之友社）の取材を通して日本各地の小学校、中学校、高等学校400校以上を訪問した。その際に私自身が執筆した授業リポートの記事の中から、今回は中学校の合唱指導に焦点をあて事例として提示する。

2. 音楽室という空間をどう捉えるか

（1）パーソナル・スペースの観点から

授業の進め方がうまいベテラン教師の授業には、ひとつの共通点が見られる。それは授業中に生徒の「動き」があることである。

「動き」には、身体を実際に移動させる「動き」もあれば、物理的には動かなくても、気持ちが動く心理的な「動き」もある。

生徒の身体を実際に動かすためには、動ける場所、つまり空間に対する意識も必要であり、実際にベテラン教師たちは音楽室という空間を効果的に活用していることがわかる。

まずはベテラン教師による空間の使い方という観点から、音楽室の学習環境について考察していきたい。

一般的な教室、あるいは音楽室という空間をパーソナル・スペースの観点から見てみると、生徒が日常的に使用している教室には30脚前後（場合によっては40脚近く）の机が並んでおり、教室はほぼ机で埋まった状態である。生徒に与えられた個人的スペースは、机1脚分の広さであり、具体的には60㎝×40㎝のスペースである。

60㎝という距離は、アメリカの文化人類学者エドワード・ホールが提唱したパーソナル・スペースの4つのゾーン、①密接距離、②個体距離、③社会距離、④公共距離で言えば、②個体距離の近接相にあたり、どちらか一方の人間が手を伸ばせば相手を捕まえられる距離、つまり極めて親しい人間だけが入ることを許される距離である。幅60㎝の机に、実際に着席している時の隣の生徒との身体の距離はもっと接近しており、家族や恋人だけが入ることを

許される①密接距離の範囲に入り込むことになる。

パーソナル・スペースは、その時々の自分の心理状態や相手との関係性によっても違いがあるが、実際の日常生活においては、自分の快適距離を自ら選択することができる環境にある。しかし教室ではそれができない。自分の席は決められており、その日の心理状態で席を自由に選ぶことも、授業中に立ち歩くことも許されてはいない。そういう意味において教室は、快適とは言えない空間かもしれない。

この点について社会心理学の立場から渋谷昌三は、教室における「こみあい」ということに触れ、狭い空間に生徒を押し込めるかたちで授業が行われれば、教師と生徒の関係や生徒同士の関係を損なう恐れもあると述べている。学習環境が、個人の心理面に影響するだけでなく、教師や生徒の関係性にまで影響することを示唆しているのである。

最近は、教室の面積を広くしたり、各教室を仕切っている壁を取り払ったり、あるいは中央に設けたオープンスペースを囲むように各教室を配置したり、といった新しい構造の学校も見られるようになったが、このような恵まれた環境の学校はまだ数少ない。現場の教師たちは従来の教室で、それをうまく活用する以外に方法はないのである。

（2）「なわばり」意識を活用した事例

この 60 ㎝という個人的スペースを音楽授業の中でうまく活用している事例がある。

東京都町田市立 T 中学校の M 教諭は、合唱指導においてこの距離を効果的に活用する。M 教諭は経験豊富なベテラン教師であり、なかでも M 教諭の合唱指導は、全国の音楽教師が目標とするところでもある。M 教諭がこれまでに赴任した学校はいずれも素晴らしい歌声を響かせる学校になっている。また合唱部の生徒と全国規模の合唱コンクール（NHK 全国学校音楽コンクール、全日本合唱コンクール、TBS こども音楽コンクール等）に出場し、全国 1 位（金賞）に何度も導くという実績も持つ。

M 教諭は、音楽室に机も椅子も置かない。声の響きがよく聞こえなくなるというのが机を置かない理由である。M 教諭は音楽室をひとつの大きなオープンスペースにして、そこに合唱用「ひな壇」を設置している。ひな壇が生徒の椅子代わりである。生徒はひな壇の上で前後 2 列の合唱隊形になり、そのまま腰を下ろす格好で普段の授業を受けている。

M 教諭がこだわっているのは、生徒と生徒の間隔である。それが約 60 ㎝（床の板目 2 つ分）であり、長年の経験からこれより広すぎても狭すぎてもいけないという。実際に生徒が 60 ㎝間隔でひな壇に並んでいる様子を見たことがあるが、机がない場合の 60 ㎝は意外にゆったりしており、生徒と生徒の間隔が適度に空いている印象にも映る。

たとえば学級に落ち着きのない生徒（多動傾向のある生徒を含む）がいる場合は、これより少しでも間隔が狭くなると、すぐに隣の生徒とおしゃべりを始めるという。逆にこれより広くなると隣で歌う生徒の声が聞こえにくくなってしまう。60 ㎝という距離は、M 教諭の長年の経験から得られた合唱指導のベストな数値なのである。

合唱用ひな壇がない場合は、生徒を合唱隊形に並ばせた時、床にラインを引くだけでも同じような効果が得られるという。床に色付きテープなどを貼ると、自分の立ち位置がひと目でわかるようになり、これが整列させる時のガイド（目印）となる。

テープを貼ることは、ガイドになるだけではなく、生徒の心理面にも影響を与える。自分の立ち位置（自分の居場所）がきちんと定まることで個人的スペースが確保でき、生徒が落ち着くようになるという。いわゆる自分の「なわばり」が守られ、居場所が確保されることで生徒は安心するのかもしれない。

M 教諭は、生徒に対するこのような手だてを「見えない壁を作る」という言葉で表現しているが、教師が何らかの手だてを講じることで、どのような音楽室であっても、生徒が授業に集中できる環境を作り出すことは可能であるということである。

（3）学習に集中できる空間とは

M 教諭のようなベテラン教師になると、学習内容はもとより学習環境を整えるという観点でも配慮

を怠らず、音楽室という空間を意図的に、かつ効果的に活用していることがわかる。

学習に集中できる空間とは具体的にどのようにして作られるのか。M 教諭の授業をさらに観察していくと、細かいところまで目が行き届いていることがわかる。

たとえば生徒の持ち物（教科書、楽譜ファイル、ペンケースなど）を置く場所である。これは置く場所が決められており、ひな壇の前段にいる生徒は自分の足もとに置き、後段の生徒は自分の後ろに置くことになっている。前段の生徒は、足もとの床の板目に合わせ、きちんと揃えて置くようにする。

こうすると見た目にもスッキリ整った印象がある。身のまわりを整理整頓することは気持ちを整えることにもつながるが、持ち物の置き場所を決める理由はそれだけではない。

これは無駄を省くための行動でもある。つまり持ち物の置き場所は、今後のパート練習に関係してくるのだが、パート練習が始まると生徒は場所を移動することになる。生徒が動く時に、この位置であれば移動の邪魔にならない、誰かに踏まれたりしない、というラインが M 教諭にはわかっているため、最初から邪魔にならない場所に置くのである。予測できる問題に対しては、前もって手だてをしておく。このような先を読む力が、学習環境を整える際には必要だと言える。

学習環境に関しては、中学校の教師より、むしろ小学校の教師の方が敏感であるかもしれない。より良い授業を実現させるために、音楽室をどのように整えるか。その環境作りに関して細部まで注意を払っている教師の一人が、埼玉県上尾市立 A 小学校の N 教諭である。

N 教諭が環境を整えた音楽室は、見るからにスッキリと片付いた清潔な印象で、小学校の音楽室にありがちな掲示物もない。机はなく、階段式になった床に椅子が 4 列に並ぶ。

机を置かず、椅子だけを使用している理由は、活動のしやすさを考えてのことだ。椅子だけなら児童でも簡単に動かすことができる。歌唱指導の際に、児童が互いの表情を見たり、互いの声を聴き合ったりする場面では、椅子を向かい合わせに、あるいはコの字型にすることが素早くできる。

音楽室というより、音楽スタジオを思わせるスッキリ片付いた環境にした背景には、ユニバーサルデザインの考え方があるという。以前は N 教諭も掲示物を多く貼り、児童が楽しいと感じられる空間にしていた時期があった。しかし情報がありすぎると気が散り、授業に集中できない児童がいたことで学習環境の改善を試みるようになったという。

掲示物は必要最小限しか貼らない。必要な情報は、その時々でテレビモニターに映し出し、前方の 1 点に情報を集める。まわりの情報が少ない方が児童は集中できるため、窓のカーテンも閉める。向こうの山に向かって歌おう、などの目的がある場合や換気のために開けることはあっても、基本的に授業はカーテンを閉めた状態で行う。

そして音楽室には時計を置かない。時計が壊れたのをきっかけに無くしてみたところ、時間が気にならなくなり、児童が活動に集中できるようになったという。終業時間が来て「えっ、もう終わり？」と驚く児童もいる。時間を決めてグループ活動をする際にはタイマーを使用しているそうだ。

より細かい部分を言えば、音楽室にある譜面台はすべて同じ形のものに統一してある。すぐに倒れてしまう折りたたみ式の譜面台ではなく、しっかりした自立式の譜面台を使用する。その理由はワークシートやファイルなどを置いたり、グループで話し合った内容を書き込んだりする台としても譜面台を活用するからだ。板の部分に丸い穴が開いた譜面台であることも重要ポイントである。穴が開いていると向こう側が見え、向こうにいる児童の様子がわかるからである。

前出の中学校、M 教諭も掲示物を多くは貼らない。その日の授業のポイントとなる 3 点ぐらいを貼るスペースがあれば十分であると述べる。そして時計は、音楽室の正面にあると生徒の気が散るので横に設置している。

音楽室をスッキリ、清潔に、きれいにするだけで

も生徒の気持ちは変わる。音楽室には余計な物を置かず、必要な物だけを厳選して置く。そういった学習環境を整えることは重要であるとM教諭も述べている。

（4）関係性と机の有無について

教師は、授業の中で生徒とどのような関係性を構築しようとしているのか。2017年の特集記事「はじめの授業徹底ガイド」（『教育音楽　中学・高校版』4月号）の中に、新学期、第1回目の授業で何が大切かについて話し合う座談会の記事が収録されている。

座談会の参加者は3人の教師でいずれも指導力があり、生徒が生き生きと参加する魅力的な授業をしている教師である。

中学生になって最初（第1回目）の授業で、教師が生徒に接する時にどのようなことに留意しているかという話題について、各教師ともに共通していたのは「最初の雰囲気作り」で、まずは「音楽室に来ると楽しい」と思えるような雰囲気にすること、次に「3年後にはこういう力がつく」という先の見通しを持たせ、音楽授業への安心感と期待感を抱かせることが重要であると述べる。

そのための環境作りとして、音楽室に机を置くか、置かないかという話題にも触れているが、3人の教師のうち1人は机を置き、あとの2人は椅子だけを使用すると述べている。

机を置かない利点としては、グループ活動や話し合いがしやすく、歌唱や器楽の際にスペースを作りやすいこと。机を置いていると答えた教師も、その学校の音楽室の形状が特殊で十分な広さがあるため、活動には支障がないこと、机を置いても机間巡視ができるように十分に前後の幅を空けていることを理由に置いていると述べている。

座談会では「目的や状況に合わせて選択するのが良い」という言葉で結論づけられていたが、つまり重要なのは、教師が生徒の中に入っていきやすい環境であるか、生徒同士が動きやすい環境であるか、ということであり、これはすなわちパーソナル・スペースにおける人と人の距離を自由に調整できる環境にあるということでもある。

人と人の物理的な距離は、すなわち心理的な距離感とも関連する。時には生徒のそばに寄り添う、時には遠くから見守る、といった距離感の調整が自由にできる環境、その時々で教師が素早く対応できる環境であるかどうかが重要な点と言える。

たとえば生徒が落ち着かない、いわゆる荒れた学校では机を置いた方が、生徒が落ち着くという現象は、生徒が心を開いていない状態では、机を用いて個人の「なわばり」を明確にし、自分の居場所を確保してやった方が安心するという状況と言えるかもしれない。

このように教師は、まず学習環境を整えた上で、生徒と積極的にコミュニケーションをとり、より良い関係性を築くための基盤づくりをしながら、授業に集中できる生徒に育てていくことが重要であると言える。

それと同時に、最初の授業では「音楽室の中では音を大切にする」「時間を守る」「忘れ物をしない」等の学習のルールを生徒に伝えていることも重要事項のひとつと言える。

前出のM教諭においても、最初の授業では音楽室のルールの話をすると共に、集中させたい時にすぐにその状態になれるよう、生徒との約束事として「ゼロの状態」（音を出さない状態）を作る習慣づけを行い、活動の最初と最後は、音のない静かな空間を意識させるようにしている。

3. どのような場面で生徒を動かすのか

（1）生徒の気分を変える

良い教師は、気分転換をさせるのがうまい教師でもあるとM教諭は言う。教師は、生徒を起立させる、着席させる、場所を移動させる、というように授業の中で生徒を動かす。それは活動内容に合わせて動かすのであるが、生徒を動かす理由はそれだけではない。

それは生徒の集中を切らさないための気分転換でもあるのだ。教師は、生徒の表情や態度を見て、

その場の空気を読み取り、気分転換が必要だと思ったタイミングで生徒を動かしている。活動の過程でそれが自然にできる教師が、良い教師ということだろう。

本来ならば立ち歩きが禁じられている授業中であるがゆえに、教師が立たせたり、歩かせたりすることで合法的にそれをさせてやる。そのタイミングがわかる教師であるかどうかが重要な鍵と言える。

生徒を動かすことにはリスクもある。移動に時間がかかりすぎればロスタイムになり、自由になって緊張感がなくなれば、生徒がだれてしまうこともあるからだ。

ベテラン教師はそのようなリスクを避けるために、生徒を動かす際には、活動内容に合わせて、あらかじめ並び方や動線を決めておくという方法をとっている。

（2）集中力と音楽室のレイアウト

生徒の気分転換、あるいは心理的開放を視野に入れた移動ということで言えば、生徒を並ばせる向きを変える、ピアノの位置を変える、等の音楽室のレイアウトを変更することでも空気が変わり、生徒の気分は変わる。

M 教諭による「4 つの音楽室」（東西南北の 4 方向を使い分ける音楽室のレイアウト）もそのひとつである。教師の立ち位置は、音楽室の形状からある程度は決まってしまうものだが、黒板を使用しなければ、教師の立ち位置は自由である。つまり東西南北のどの向きに生徒を並ばせても良いということになる。

その際はピアノをどこに置くか、時計の位置をどうするか、等の配慮も必要になるが、「授業がうまくいかない」「生徒が集中できていない」という場合は、レイアウトを工夫することで改善できることもあるということだ。

合唱指導で言えば、生徒が落ち着かない時は、合唱の並び方を変えるだけでも雰囲気を変えることができる。M 教諭の方法を紹介すると、通常は左からソプラノ、アルト、テノール、バスと並んでいる合唱隊形を変えて、男子を前列、女子を後列に配置する。あるいは男子を中央、それを囲むように女子を配置する。

生徒個人の問題であれば、問題のある生徒の隣にある生徒を置くと安心して歌う、落ち着いて静かになる、というケースもある。前出の小学校の事例と同様に、音楽室のカーテンを開けるか閉めるかでも生徒の集中力に違いが出ると M 教諭は述べている。

M 教諭が合唱指導の際に、目的に応じて使い分けている隊形を挙げると次のようになる。

①「フェルマータ隊形」：音楽記号のフェルマータの形のように生徒を半円形に並べ、その中央にピアノを置く。教師から全体が見渡せるので誰が歌え、誰が歌えないのかがよくわかる隊形。歌えていない生徒の隣に、歌える生徒を配置すると良い。

②「H 型隊形」：音楽室の中央にピアノを置き、それを挟んで生徒を向かい合わせに並ばせる。声のキャッチボールができる隊形。ある程度、曲が歌えるようになったらこの隊形にして、声を遠くに飛ばして互いの声をぶつける練習をすると良い。

③「電車型隊形」：生徒を前後の横 2 列に並ばせ、その前にピアノを置く。合唱コンクールの並び方と同じであるため、本番がイメージしやすい隊形。M 教諭は普段の授業をこの隊形で行っており、ひな壇を椅子代わりに使用。生徒の移動時間の無駄をなくす対策として、ひな壇で生徒が素早く立ったり、座ったりできるように何度か練習をさせている。

（3）身体感覚に着目した事例

生徒が移動する時、ロスタイムを作らないように無駄のない動線を考えるのは、東京学芸大学附属 T 中学校の W 教諭も同じである。

W 教諭は「環境は、生徒の無意識の部分に働きかけるもの」と述べ、学習環境の中でもとくに生徒の身体感覚に関して高い意識をもつ教師の一人である。

W 教諭の授業では、実によく生徒を動かす。合唱の音取りをしている最中にも、生徒をピアノのまわりに集めたり、合唱隊形にしたり、常に動いてい

る印象である。グランドピアノには、教師が一人でも動かせるよう、キャスターが取り付けられており、生徒が移動する度に教師はピアノの位置を変え、常に全体に目が行き届くようにしている。

移動する度に生徒の表情も変わる。和気あいあいとした雰囲気で歌う場面もあれば、緊張感をもって真剣に歌う場面もある。移動することで生徒がリラックスしたり、気持ちの切り替えをしたり、集中したりする様子が見て取れる。

表現活動とは、身体と共にあるものであり、表現とは心の開放でもある。音楽室はそれを可能にする空間であると捉え、おもに身体表現を伴った活動を取り入れているのがW教諭の授業の特徴と言える。

中学生に、このような身体表現を伴った活動をさせる手だてとして、W教諭は、中学1年生の最初の頃に、生徒同士が触れあう活動から開始することにしている。自由に動けるスペースで、隣の人と肩を組んで歌わせたり、全員で大きな円になり、身体を左右に揺らしながら歌わせたり、他者と触れ合わせることで音楽表現の基本となる心の開放を促している。このような活動を経て、混声四部合唱に向けた歌唱指導へと進むのである。

4. 関係性の構築を視野に入れた指導

(1) パート練習から何が見えるのか

第一に音楽室の学習環境を整えること。第二に生徒を動かして気分転換をさせ、授業に集中できる環境作りをすること。そして第三に生徒同士がうまく関わることのできる環境作りをすること。これらは、より良い授業を実現するためには必要なことである。

合唱指導において生徒同士が関わる活動と言えばパート練習である。パート練習はおもにパートリーダーが中心となり、生徒の自主性によって進められる活動である。教師の目から生徒が離れることもあるためトラブルも起こりやすく、教師を対象とした講習会等のアンケートでは、どうすればパート練習をうまくさせられるか、という質問が寄せられることも多い。

ベテラン教師が見ている点は、何か問題が起こりそうだという兆候である。歌うという行為は、人の心理面と密接に関わっているため、何かが起きている生徒は歌わなくなる。まずはそういう兆候を見逃さないことである。

たとえばM教諭は、パート練習の時にピアノに近づきすぎて姿勢が悪くなっている生徒に「どうした？」「大丈夫か？」「きちんと立つ」等の声かけをする。また学級内の人間関係を観察し、一緒にしたらトラブルになるような生徒同士は物理的に距離を離すか、その間にクッションとなる生徒を入れるかする。

パート練習をさせる際には、このような起こりそうな問題に注意を払いながら、それと同時にリーダーとなる生徒を授業の中で育てていく必要もある。

パートリーダーは各パートのまとめ役であり、音やリズムが合っているかを確認したり、教師の代わりに指示を出したりする役割をする。そのためリーダーになる生徒は、集団をまとめることができる生徒、かつ音楽的なアドバイスができる生徒が良いとM教諭は言う。

リーダーが育ってくると、自分たちの力で自主的にパート練習を進められるだけでなく、教師が一つのパートを指導している時に、他のパートのリーダーが教師の代わりに動いて自主的に練習を始め、複数の活動を同時進行で行うことが可能となる。M教諭はそれを「裏番組を成立させる」と言っており、無駄な時間を作らないための手だてとしている。

(2) パート練習を効率よく進めるために

パート練習にもいろいろな方法があるが、最初のうちは教師の目の届くところでさせることが多いようだ。パート練習の環境作りは、教師の見通しが良くなる工夫をすることがひとつのポイントである。

M教諭は、音楽室の四隅にキーボードを置き、4パートを分ける。各パートがそれぞれに練習を始めると音が混じって騒然となるため、全体で一斉にパート練習をするというスタイルである。ある程度

歌えるようになったら各パートが中央を向き、すぐに全体で合わせることも可能なスタイルである。

パート練習の際に、生徒同士の関わりを大事にし、他者との関係性の築き方も含めて指導する教師の一人が、東京都府中市立F中学校のY教諭である。

Y教諭も、最初のうちは教師の目が届きやすい1つの教室に全パートを集め、パート練習をさせるのが良いと述べる。

Y教諭は、音楽室が少々うるさくなっても全体を同時に指導する方が良いという考えだ。その理由は、全員が関わることで育っていく部分もあるからだ。Y教諭は各パートを競わせたり、パートリーダーをフォローする言葉をかけたりしながら、問題点を共有することで、全体を育てていく。

たとえばパート練習の雰囲気が悪くなった時、Y教諭は全体を止め、「はい、中断。今のパート練習はこうなっている。一番いいのはアルト、言葉のやり取りをよくやっていて、注文を出している数も一番多い」というように良い点を具体的に伝える。それから再びパート練習に戻し、その後、改善が見られたら、「この数分で、こんなところが良くなった」と雰囲気が悪かったパートをほめる。

パートリーダーに対しても「今のやり方は良かった」「みんながやりやすそうだった」、あるいは「あのやり方ではみんながついてこられない」等のアドバイスをする。

パート練習の目的をはっきりさせ、それを可能にするための生徒同士のやり取りの仕方も教える、というのがY教諭のやり方である。自分たちでやったことが成果となって出てくれば、それが生徒のモチベーションにもつながるというわけである。

校内合唱コンクールの本番が近くなり、静かなところで集中して練習したいというパートが出てきたら教室を分けるという。

(3) 会話の練習をさせる

集団の中でいろいろな役割を担うことによって生徒は育つ。パート練習はそういった社会性を学ばせる場でもある。最終的に教師が目指しているのは、生徒の自立であり、生徒が自らの力で学べる集団になっていくことである。Y教諭は、そのことを「発声練習をさせれば歌はうまくなるが、大事なのは自分でうまくなれること」という言葉で表現する。

そしてパート練習がうまくいかない原因について「パートリーダーの指示がうまくいっていない。あるいは受け身になっているまわりの生徒に問題がある」とY教諭は述べる。つまりパート練習の際に交わされる会話の問題が大きいというのだ。

パートリーダーがどのような言葉（または態度）で指示を出し、それに対してまわりの生徒がどのような返答をしたのか。とくに1年生はそのやり取りの重要性がよくわかっていないため、Y教諭は1年生の最初に、まずはパート練習のやり方を指導する。生徒同士の関係性がうまく作れなければ、自分たちでできるようにはならないからである。

パート練習は「みんなが」「全員が」という言葉がキーワードとなる。パート全体の共通見解を見いだすことができなければ、共に音楽を作っていくことはできない。だからこそコミュニケーションが大事だというのがY教諭の考えだ。

具体的に、会話の練習とは、パートリーダーの指示の出し方と、それに対するまわりの生徒のレスポンス（返事、相槌、反応、言葉の交わし方等）である。最初はそれらをセリフのように反復して覚えていくのである。

たとえばパートリーダーの指示の出し方としては「集合してください」「今からこれをやります」「ここからここまでを歌います」「CDをかけます」等である。まわりの生徒への質問の仕方としては「今のどうだった？」「〇〇さん、どうですか？」等である。

それに対する、まわりの生徒のレスポンスとしては「今のところがよくわかりません」「もう一度やってください」「音をください」「よくわかりました」等であり、音楽的なリクエストとしては「ここがクレッシェンドになっていなかったと思います」「リズムが合っていません」「さっきより良くなったと思います」等である。

ここまでしなければ会話ができないのかと思うかもしれないが、これが今の一般的な中学校の現状であると言える。

Y 教諭は、一度のパート練習で、全員が 2 回は発言するように、と生徒に伝えており、内気で口の重い生徒に対しては、パートリーダーから「〇〇さんはどうですか？」と質問させるようにしている。まわりの生徒が何も発言しない状況では、わからなくても練習がそのまま進んでしまうことになり、そうなると生徒のモチベーションは低下する。そのようなパート練習にしないために、全員が「できた」「できない」「わからない」等のやり取りをし、全員が納得するかたちで練習を進めていくことがパート練習では大事だと言える。

校内合唱コンクールの約 1 ヶ月前に、Y 教諭は生徒にある課題を出す。それは自分とクラスメイトの関係性を簡単な図にするものである。自分から相手への働きかけ、また相手から自分への働きかけを矢印で示し、誰から誰に向かってコミュニケーションがとられているかを視覚的に見るための図である。

この図を書くことによって、自分は、相手から受けるばかりで相手に向かう矢印がないことに初めて気付く生徒もいるという。その場合は自分から相手に向かう矢印を増やす努力をするように促す。相手に向かう新しい矢印を増やしていく場がパート練習でもあるのだ。

5. おわりに

今年、平成 29 年 3 月 31 日に告示された新・学習指導要領の特徴は、学校教育で育成をめざす資質や能力が「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」という 3 本の柱に整理され、すべての教科において学ぶ意義というものがより明確化されたことである。

つまり教師は「何を教えるか」よりも「何のために教えるか」について深く考えなければならない状況になった。

これは、めまぐるしく変化する現代社会に生きている生徒たちが、この先の未来に向け、身に付けていくべき力が、単に知識や技能を得ることだけにとどまらず、その知識や技能を実際に使える力、つまりその時々の状況を判断しながら、それに対応できる力が求められているということだろう。

それに伴って教師の役割についても、教える役割より、むしろ学びの場を設定する役割、学びをコーディネートする役割が求められることになり、授業の中での関係性を構築していく力が、これまでより重視される方向へ進むことが予想される。

しかしながら、この方向性は決して新しいものではなく、生徒が自主的に動き、生き生きと学んでいる授業を実現しているベテラン教師たちはすでに関係性によって学びを深める授業を実践していることが、本稿からも明らかとなった。関係性によって深めていく学びは、音楽科のひとつの特性でもある。今後は学習環境や非言語コミュニケーションの可能性についても、教育方法に関わる重要なテーマのひとつとして、さらなる研究を進める必要があると考える。

参考文献

渋谷昌三（1992）『人と人との快適距離ーパーソナル・スペースとは何か』日本放送出版協会

眞鍋淳一（2017）『授業のための合唱指導虎の巻』音楽之友社

伊野義博（2017）特集「新・学習指導要領を読み解く」『教育音楽　中学・高校版』6 月号　音楽之友社

伊藤ひさえ（2012-2017）『教育音楽　中学･高校版』音楽之友社（以下、記事一覧）

・授業ライブ・リポート「表現活動は、私たちの身体と共にある」2012 年 7 月号

・特集「音楽あふれる学校に学ぶ　音楽の力」2013 年 8 月号

・特集「個の力を伸ばす部活指導ー個から全体へチームづくりの極意」2014 年 8 月号

・特集「校内合唱コンクールに向けて　パート練習

をレベルアップ」2014 年 9 月号
・特集「校内合唱コンクールに向けて　パート練習をレベルアップ」2015 年 9 月号
・特集「1 年生の『初めの授業』完全リポート」2016 年 6 月号
・特集「短時間で上達する合唱指導」2016 年 10 月号
・特集「はじめの授業徹底ガイド」2017 年 4 月号
伊藤ひさえ（2017）『教育音楽　小学版』音楽之友社
・特集「準備はいい？　新学期の授業」2017 年 3 月号

（いとう　ひさえ）東京未来大学こども心理学部
（非常勤講師）